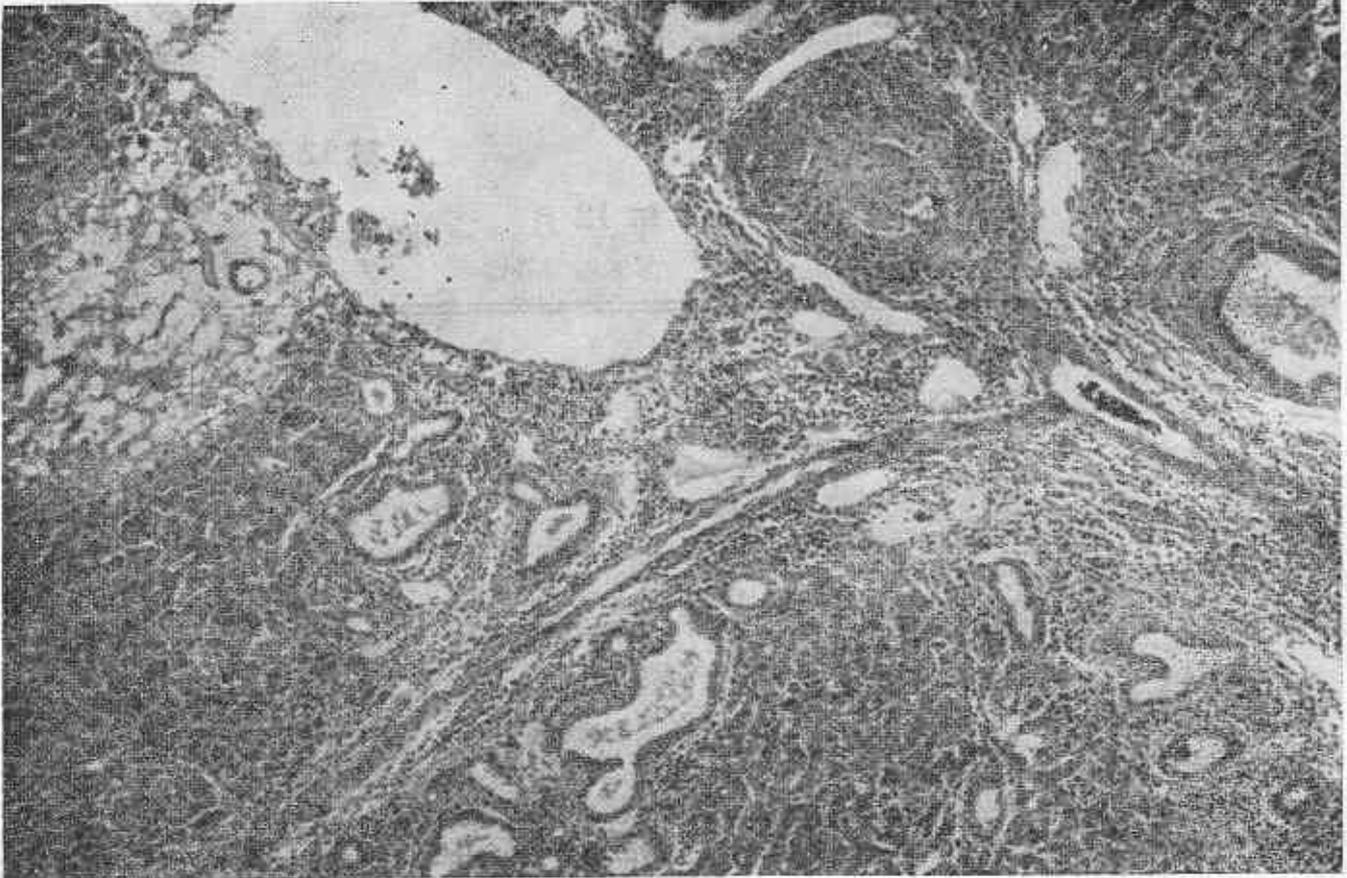


ミンクのアリュージョン病

東京大学農学部家畜病理学教室 第7回獣医病理学研修会 標本 No. 98



アリュージョン病は形質細胞の増殖，動脈周囲炎，動脈壁の類線維素変性，糸球体病変および過 γ -グロブリン血症を示すことから，自己免疫病または膠原病としての変化が注目されているミンクの進行性致死の疾患で，ミンクの主要生産国では野外発生例ならびに実験感染例に関し多くの記載がなされている。

1965年9月に宮城県下の某飼育場より斃死ミンクの病性鑑定の依頼を受け病理組織学的にアリュージョン病と診断し，さらに現地でヨード凝集試験 (IAT) を実施して採取したものを含めて16例の本病の病畜につき病理組織学的検査を行なった。これらの例に認められた主な所見は，肝，腎，脾，肺，心筋，消化管，リンパ節および脳における形質細胞浸潤，肝，腎，肺および脳における血管病変，糸球体病変と尿細管の変性，胆管の拡張と増生および脾における巨核球の出現である。提出標本 (ヴァイオレット♀，6カ月) はIAT強陽性を示したもので，本病の典型的な肝臓病変が認められた例である。

写真 (H-E, $\times 100$) の中央右上の動脈壁は多数の形質細胞により取り囲まれ，中膜には円形細胞の浸潤とその内側にエオジンに好染する均質な部位を認め明らかに肥厚しており，また内膜の増生が存在し，動脈炎または動脈周囲炎の像を示している。さらに胆管の拡張と分枝・増生 (中央下) および壊死巣 (左) も認め，これらの周囲の Glisson 氏鞘には著明な形質細胞浸潤が認められ

る。血管病変は中，小動脈壁に分節状に存在しており，この写真と同様な病変を示した血管壁を各種の染色法により検討した結果，内膜の増生と内弾性板の断裂，平滑筋の変性消失があり，また中膜のエオジン好染部には metachromasia 陽性で Alcian Blue, Colloidal Iron 陽性物質 (酸性粘液多糖類) の沈着を認め，また一部にPAS陽性物質も存在し，所謂類線維素変性と考えられる変化を認めた。形質細胞浸潤は中心静脈周囲にも存在しており少数のリンパ球も混在した。形質細胞浸潤部には細胞質内にエオジンに好染する大型滴状物をもつ球形に膨大した細胞を認め，各種の染色性からこれらの細胞内滴状物は Russell Bodies と考えられ，これらの細胞は Grape Cell と呼ばれる異常な形質細胞に一致する。胆管の増生は本管からの芽出による変化で，胆栓や黄疸を認めぬため胆汁の流出障害はないと思われる。また，壊死巣は Glisson 氏鞘に隣接した実質内に存在し，肝細胞のみ消失し線維構築はそのまま残存しており細胞反応を欠くもので，糸球体病変と尿細管の変性の存在から尿毒症性変化と考えられる。

なを，本例の糸球体はエオジン好染物質が増加しており，PAS および PAM 染色により毛細管基底膜の肥厚は軽く，糸球体各葉の中心部には血管極に連なる明らかに肥厚した mesangium 層を認めた。この他の例でも同様な変化が主体であつたが，明瞭な Wire-Loop 病変や大型の結節状の硝子様物質が沈着した糸球体を認める例も存在した。